

# 井上円了博士の世界旅行

瀧田夏樹

*takida natsumi*

本日わたくしがこれからお話いたします明治時代の人、井上円了さんという教育者の名前については、これまで聞いたことがないという方も多いのではないかと思います。井上円了は、明治二十年に、「哲学館」という、現在の東洋大学の前身である学校を建てた哲学者なのですが、仏教関係の本をたくさん書いていたり、また、明治初期の社会に精神的に重要な働きを及ぼした「政教社」という、思想グループの一員としても、歴史に名を残している人です。あるいは皆様方のなかには、この井上円了を、「妖怪博士」というあだ名で聞かれた覚えのある方もいらっしゃるかも知れません。明治・大正時代の「お化け」の研究者としては、かなり有名な方でありまして、幽霊を、迷信や思い違いなどからくる恐怖心として説明し、人々を新しい時代に解放しようとした人として知られております。

ところで井上円了を現代から見なおした場合、その一番新しくユニークなところはどこかと問うならば、当時もっとも広く日本を実地に歩いてよく日本社会を知っていた人としてでありましょう。円了は、生涯にわたって日本中を講演して回り、新しい日本のモラルはどうあるべきかを説くことに、他に例を見ないほどの時間とエネルギーを費やした人でありました。学校の先生であると同時に、むしろ学校の外で行う「社会教育」の方に、情

熱を燃やした人として知られております。もつとも、そのきっかけの一つには、確かに、自分の作った哲学館という学校を大きくする上で経済的な支援を求めまして、大先輩の勝海舟のアドバイスを受けるなどした後、学校のために寄金募集の講演旅行を始めたという側面があります。因みに、この勝海舟という人は、江戸城明け渡し の重要な局面で、官軍の司令官だった西郷隆盛と談判して、東京を戦火から守ったことで有名ですが、円了とは年齢にして三十五歳ほどの違いがあります。万延元年、咸臨丸という小さな機帆船の指揮官として、初めて日本人の手で太平洋をアメリカに渡った勇敢な海軍軍人でしたが、最初の世界旅行から帰国したばかりの若い円了の、この大胆な教育事業を励まして、いろいろの助言をしたばかりか、当時としては大金の百円を寄付してくれたということがありました。宗教界を含め、一切の財団などの援助なしに学校を始めた円了でしたから、寄付集めの行脚は、いわば、彼の宿命だったともいえます。お金は思うようには集まらなかったようでありまして、口の悪い人は、「円了の靴は、キフ、キフと音がする」などと陰口したそうであります。

しかし、そういうことと並んで、学校の外の世界で、社会一般の人々とじかに話し合うことが、新しい日本にとつては、どんなに大切なことであるかということ、円了は確信として持っていたようであります。樺太、台湾、朝鮮といった元日本領だった遠い土地を含め、沖縄・小笠原諸島にいたる日本全土に、円了が足を踏み入れなかった場所はほとんどなかったといつてよいでしょう。この三島市でも、明治三十二年冬に円了の講演が行われております。ずいぶん昔の話なので、聴いた人は、ひいお祖父さんとか、その前の世代に当たります。講演を聴いた人の数も膨大で、明治時代の終わり頃までには、五十六万人を超えていたといわれております。

この国内講演旅行の記録を含め、井上円了さんの書いた文献はおびただしくあるのですが、そうした本をまとめる仕事、大学を中心に、実はもう長年続いております、その主なものはすでに『井上円了選集』として出

版されておりません。その最後の一卷にあたるものが、第二十三巻として、今年の秋に出ることになっております。その本には、井上円了の書いた三冊の世界旅行記が収められることになっており、それが、今日のお話のもとなっております。国内の旅行家としては知られていた円了ですが、その他に世界旅行を、しかも明治時代の間に三回もしていたのかというのが、驚きの第一でした。

その一冊目は、明治二十二年に出された『欧米各国政教日記』で、一年以上をかけてアメリカやヨーロッパで見た、宗教や社会事情を報告したもので、余り読み易い本ではありませんが、円了の教育事業にとって忘れてはならない一冊です。二つ目は、明治三十七年に出版した『西航日録』で、世界各国のあらゆる教育・社会事情を見て回り、自分の教育事業を反省しようとした記録です。三冊目が、『南半球五万哩』という分厚い旅行記で、これは、明治も終わろうとする年に出されました。これは、巡回講演の聴講者のなかに移民の希望者たちがおり、彼らの願いをいれて、オーストラリアや南米を実地に見学するための旅行でありました。このように、三つの旅行のそれぞれが、はつきりした目標を持った旅であったのです。

現在はジェット機の時代ですから、数時間あるいは十数時間で、地球のどこへでも行くことが出来ますが、その頃は船ですから、短くとも数ヶ月とか一年近くを計算に入れなければなりません。それだけに、学校の先生といった仕事と世界旅行は、なかなか両立しにくいことであつたでしょう。またいくら貧乏旅行を心がけても、世界を転々とする一年近い旅行では、旅費だけでも大変だつたと思います。生涯に三度の世界旅行でしたが、円了個人としては、これが精一杯のところだつたと思います。何故そんな無理をしてまで世界を見て回らなければならなかつたのか、と考えてしまいます。そこで円了の書き残した旅行記を読んでみますと、そのどれからも、自分が大勢の日本人を代表して「何でも見て来るんだ」という、強い気概を感じます。それが、井上円了

の世界漫遊旅行のスタイルを決定しているといつていいでしょう。そしてよく眺めてみますと、一つ一つの旅行が、長い明治時代のその時々課題や問題を、微妙な形で、確実に反映させているのは、不思議なくらいです。

振り返ってみますと、明治という時代は、驚くほど「世界旅行」の盛んだった時代だと申せます。そもそも明治維新とは、世界をこの目で見てみよう、百聞は一見にしかず、といった気持ちなしには、何ひとつ始まらない、そんな時代だったのです。長く厳しい鎖国政策のブランクを埋めるため、多くの留學生がヨーロッパの国々やアメリカに送り出されて色々のことを学びました。ドイツに派遣された森鷗外にしろ、ロンドンで研究を命じられた夏目漱石にしろ、アメリカ、フランスでよく遊びよく学んだ永井荷風にしろ、彼らはみな、或る一つ二つの西洋の国から、自分の仕事の核となるものを学んで帰って来ました。あらゆる分野でそうでしたが、殊に多くの自然科学者にとっては、必要不可欠な実体験でした。一方、一度に広くすべてを見、何でも吸収してくるという形でなされる世界一周旅行もありました。このタイプでは、何よりも、明治四年十一月から二十ヶ月（一年八ヶ月）間も国を明けて世界事情を勉強に行った、岩倉具視、木戸孝允、伊藤博文、大久保利通ら、政府の要人たちの行動が忘れられません。日本の政府そのものが半分空っぽになっても、海外で実物を「見てくる」ということの方が、どんなに重要であったかは、その岩倉使節団の世界旅行を生き生きと詳しく書き残した、久米邦武の『米欧回覧実記』（岩波書店）をご覧いただければお分かりのことと思います。井上円了の行動も、大きく見れば、その流れにそつたものということが出来るでしょう。

そこで先ず、井上円了三十歳、明治二十一年六月から一年以上をかけたアメリカ、ヨーロッパへの旅から眺め

ていきましよう。円了は、その前の年の九月に、哲学館を創ったばかりでした。これはどんな学校だったかといえますと、経済的にゆとりがなくて大学の課程に進めず、そのため外国語の原書を読む力のない人々のために、「哲学」を早道で勉強させるための学校として建てられたのです。当時大学といえば、東京帝国大学ひとつしかなかったのですから、そういう勉強をしたいという、貧しいけれども優秀な青年たちの応募者も多かったといえます。また間もなく、学校に通えない青年たちのためにも、「哲学館講義録」を出し、今という通信教育を始めたりした。円了は、自分が東大で専攻した哲学を、すべての学問のおおもとであると信じており、これを多くの人に学ばせたいと考えていました。これは、一昔前に、福沢諭吉が提唱した「実学」、つまり、法律学、経済学といった実用の学問分野のすすめとは、違った方向をめざしています。時代がそれだけ進んで、精神的な面を要求し始めたことの現われといえましよう。

しかし、そのせつかく立ち上げたばかりの「哲学館」校長の責任ある仕事を、一年もたたないのに人にあずけて欧米の旅に出発するには、よほどの理由がなければなりません。その理由とは何だったのでしょうか。理由の第一が、アメリカやヨーロッパの宗教事情、具体的には、キリスト教の視察ということでした。円了は寺に生まれ、仏教徒として育ち、新しい日本の宗教は仏教を改良していく他にはないと考えていましたが、新潟の長岡洋学校生徒だった時分から、新しい、外からの宗教としてのキリスト教にも関心をもち、聖書や教会によって深く勉強していたようです。しかし、教会や牧師さんたちの活発な活動を見ますと、あまり活発とはいえない仏教のお坊さんの行動とは、ちがう種類の勢いを感じました。そこで、聖書を、当時流行の「進化論」によって批判することで、キリスト教は日本の宗教にはそぐわない宗教ではないかとする意見を書物の形で論じ、その反キリスト教論はかなりよく読まれたのでした。二十歳代後半のことです。そういうことがあったものですから、今明治

二十一年、つまり翌年の憲法制定も目前にせまったこの時期を迎え、あらゆる議論が飛び交うなかで、新しい日本の宗教は将来どうあるべきかということをも、改めて真剣に考えることになったのだと、想像されます。今まで、頭で批判してきたキリスト教に対して、もう一步責任をとりたいと感じたともいえましよう。

元来宗教というものは、生活に密着したものであります。人々が空気のようにそのなかで生きている宗教を体験してこそ、その宗教は理解されたといえるでしょう。円了は欧米に乗り込んで、一年をかけてそのキリスト教を経験したわけですが、宗教が実に個人的なものであることを円了は発見しました。それぞれの国にその国独自の個性をもったキリスト教が育っていると、円了は見ました。宗教教育をしつかりやっている所もあれば、どう見てもたるんでいるとしか思えない国もありました。いろいろの教会を回り、牧師さんの話を聞き、人と議論したりするうちに、自分が思い描く日本の宗教にも、個性としての自覚が生まれ、何よりも、宗教というものを、世界のなかで大きく見なおす得がたい経験を積むことになりました。「キリスト教」は日本にはそぐわない、といった気持ちは変えられませんが、この世界体験が、円了自身を大きく変えたことが一番大きな収穫でした。旅行記には、実に細やかなおびただしい興味ある観察が満載されており、キリスト教社会の特徴をよく拾い上げて報告しております。

たとえば、アメリカ社会では、婦人が先ず深く教会と結びついており、そこから社会のモラル・リーダーとしての位置づけを得られていることや、教会と子供の関係の深さなどは、今の表現ではありませんが、側面からはつきり描写してあり、われわれに「若草物語」その他の映画でおなじみのアメリカン・ライフを彷彿させますし、教会活動と関連するピクニックの行事の報告は、映画「ピクニック」をまざまざと思い出させてくれたりします。明治時代の文体ですが、こんな風です。

米国の日曜は朝十時半頃を以つて寺時と称し礼拝始まる是れ朝時の礼拝なり凡そ其の前十五分に鳴鐘ありて参詣を促す我邦の寺院の如し次に午後七時礼拝又始まる是れ夕時の礼拝なり其の他午後三時に午後の礼拝を行ふ寺あれども一般ならず

米国にて同志相募り遠足遊山をなす事あり之を「ピクニック」といふ然るときは予め時日と場所とを定め有志のものへ切符を売り渡す若し其の場所水浜なれば当日端舟と楽隊とを用意し会するもの皆弁当を携え共に水を渡りて予め期したる場所に到り舟を停めて男女適意に野遊をなし晩に至りて再び舟に乗じて帰る当日切符より得たる所の金は端舟と楽隊との費用を除き其の余は尽く寺院貧院等へ寄付して慈善に用ふと云ふ

米国の寺院には毎月一二回「ソシール」と称し其檀徒のもの各其の友人知己を誘ひ寺院に至り互に紹介し互に談話し茶菓を喫して去る事あり即ち小懇親会なり故に米国の寺院は説教場の外に待合所を兼ねるものなり  
こうした観察は、たとえ傍観者によるものであつても、生活のなかからなされたものだけに、単なる視察とはちがつた生命を感じさせてくれます。また西洋社会の本質のなかに、どれだけ「慈善」（現代の「福祉」という言葉の方がずっと大きい内容を含んでいるのでしょうか）の精神がしみとおっているかは、至るところで感じさせられます。たとえば大西洋を船でイギリスに渡つた折の記録にこうあります。

大西洋渡航の節船中にて一夕音曲会を催ふせし事あり当夕は船客中に一芸を有するものを撰み唱歌に巧なるものは唱歌し奏楽に長するものは奏楽し予め其順序を定め逐次に其芸を演せしむ恰も我東京の寄席の如し会終るに臨み聴衆より各其志に応して五銭乃至二三十銭を徴集し其金は米国の慈善会に寄付して慈善の用に供ふと

また教会というものについては、必ず高い塔があり、町中のどこからでもその位置がわかり、牧師の活動も教会員の生活に密着して、なかなか尊敬されている。村はずれや、町の隅っこにある日本の寺院とは、趣きがちがう。そして、その教会員が自発的に慈善活動や、生活援助活動を組織するが、これはいい習慣だとあって、われわれの心に訴えるものがあります。円了は、後年、東京・中野に、広大な「哲学堂公園」というものを設けまして、一般の人々にも開放し、これは現在も東京都の施設としてよく利用されております。この公園は、肉体の休養の場所としての日比谷公園、上野公園に対して、西洋の教会にあたる、日曜日の精神安息の場所にあてようという考えに出たものといわれております。

この旅行記の何箇所かで円了が主張しております、「大教育」の考え方も、このような広い社会のつながりの自覚からもたらされたものです。それは、教育というものが単に学校のなかだけにあるものではなく、取り巻くあらゆる現象が教材になるのだとするものでありまして、強く社会人教育・成人教育の方向性をもっております。そして以後の円了の教育観を決定するものともなりました<sup>(1)</sup>。これこそが、円了みずから、世界の風を浴びることによって獲得した、最初の世界旅行の貴重な収穫とみるものが出来ましょう。「世界の中で見る」ことがいかに得がたく貴重であるか、がその後忘れられることはありませんでした。

さて最初の世界旅行のほぼ十四年後、明治三十五年十一月に、円了は、二回目の世界漫遊に旅立ちます。これ



は、自分が哲学館で十五年間やってきた教育の成果を、世界のなかで確認しようとする意味をもった旅でしたが、世界各地で活躍している哲学館卒業生や元生徒、或いは元先生方と、いろいろの外国の土地で旧交を温めました。これは学校としての哲学館の歩みがこまではほぼ順調だったことを物語ります。この世界旅行を記録した『西航日録』からは、主として二つのエピソードにしぼってお話を進めたいと思います。一つは、元哲学館で勉強したことのある、一人の世界的冒険家と再会した喜ばしい出来事です。そして、もう一つは、旅の途中で起こってしまった、哲学館の運命を左右するような、あまり楽しくない事件についてのお話であります。

先ず哲学館出身者との出会いのうち、もっとも意味深かったのは、西回りのこの旅行最初の長い滞在地で仏教発祥の地、インド、カルカッタでの河口慧海との再会でした。河口慧海といっても、今の皆様はほとんどご存知ないかも知れません。あとで一寸説明を加えたいと思いますが、あの南極探検で有名な、明治時代を代表する国民的冒険家、白瀬中尉と並べて賞賛されることの多い、チベット探検家の修行者の名前です。井上円了は、別の卒業生で、サンスクリット研究家の大宮孝潤という留学生をカルカッタに訪ね、そこで偶然に慧海と再会したのです。そしてその慧海が、遠来の井上先生をダージリン、タイガーヒル、ベナレス、ボンベイといった、インドの重要な土地へと案内してくれました。

慧海はこのとき三十七歳でしたが、これからご紹介するような、超人的な冒険を一つなし終えたばかりで、その大冒険の疲れから、一種のマラリアにかかり、そのチスター熱という名前をもった危険な病気から、ようやく立ち直ったばかりの所でした。実はこの河口慧海、哲学館を卒業まではしておりません。学校は中退し、黄檗宗出身ながら、どの宗派にも所属せず、独りで道を求める生き方を選んだ、強く自由な精神の持ち主です。そして、独りで修行しているうち、どうしても或るお経（大蔵教）をサンスクリットの原書で比較したくなり、イン

ドにも余り存在しないといわれたそのお経の原典を求めて、チベットまで行こうと決心します。所がチベットは、十九世紀後半から、ヨーロッパの侵略を恐れて、厳しい鎖国政策をとっていることで有名な国でした。(一昔前の日本に似ています)どんなに偉い学者でも、探検家でも、宗教家でも、外国人であるかぎり、国境から一步も入れてもらえなかったのです。出入り自由なのは、チベット人と中国人だけでした。慧海はしかし、そこにくじけませんでした。時間を一年以上もかけてネパール社会に溶け込み、チベット語やネパール語を勉強したり、お経を読み、座禅をして修行したりしているうちに、すっかり中国系の坊さんと区別がつかなくなってきました。それでも正式の手続きでは入国できないことが分かっていますから、明治三十三年六月という夏の或る日、現代のヒマラヤ登山隊が、酸素や装備をたくさん持つて登って行くようなネパール・ルートを、たった一人で、何の装備ももたず川沿いに、首都のラサを目指しました。

空気の薄い数千メートル級の高山地帯ですから、常に気持ちをしっかりと持っていなければなりません。夏とはいえ、凍死や、溺死、餓死の危険に何度も襲われましたし、凶暴な山賊に遭遇したこともあったようです。こういう話は、後になって発表された『チベット旅行記』(今は、白水社から出ている)にくわしく載っておりますが、余りに想像を絶する内容のせいもあって、日本のヒマラヤ登山経験者がたくさん出てきた第二次大戦後まで、余り信じてもらえないうらみがありました。しかし外国では早くから、たとえばスヴェン・ヘディンといった大探検家から、慧海の冒険の偉大さは高く評価されていたのです。さて首都ラサでも、慧海はまんまとチベット系中国人でとおしてしまいます。そこで修行と勉強を心ゆくまで積んだばかりか、他人の病気を治す力も自然に身にそなわってきまして、大勢の病人を治すなどして、みんなから名医としても慕われるようになったのです。そして遂には法王ダライ・ラマの招待を受けるほどの有名人になりました。しかしこれでかえって身分がばれる恐れ

が出てきました。そこで、ほぼ一年後、世話になった人に迷惑がかからないようにずいぶん注意して、チベットを脱出したのですが、彼がインドに無事に帰りが着いた後で、慧海が日本人つまり外国人だったことがわかったらしく、慧海の面倒をみた大臣や先生が、牢屋に入れられたという知らせが参ります。そこで、病氣療養中だった慧海も寝ているわけにいかなくなり、ネパール当局を通じてその人たちを救出するためにカルカッタに出でました。そこへ円了先生がはるばるやって来たというわけなのでした。

この『西航日録』という旅行記の巻頭には、円了がカルカッタで大宮氏、慧海と三人で撮った記念写真一枚だけが掲げられているのですが、どえらい弟子を持ったしまった先生の喜びが伝わってくるような出来事でありました。

もう一つのエピソードは、この旅行中イギリスのロンドンで日本からの月遅れのニュースで知った、自分の学校に関する不幸な出来事であります。これは、「哲学館事件」という名前で明治の教育史にも残っている事件です。事柄を簡単に説明しますと、こういう事です。その頃は教育機関に対する文部省の監督が厳しく、使っている教科書や、その教え方、試験問題や生徒の答案などまで、文部省の役人がチェックしていたようです。明治三十五年の三年生の授業で使われた倫理学の教科書に、イギリスの有名な哲学者ミューアヘッドの本があり、そのなかで、自由のために暴君を弑逆したとしても、動機が善であるならば悪とはならないという、そのような前提で論じられた、いずれにしても道徳上の微妙な問題をテーゼとして扱った部分がありました。西洋の歴史では幾つかそういう革命の例もあり、学問的には何の問題もなく認められていることですが、文部省の視学官は、日本の国体を持ち出し、これに批評を加えぬ教え方に問題があるといって、批判しました。井上円了は、担当の先生と

一緒に文部省に向いて種々説明し、極力誤解を解く努力を払い、問題はそれで解決したと思われました。ところが、円了が海外にいる間に、文部省は、哲学館が持っている教員免許に関するとても大切な権利を取り上げようという、ずいぶん乱暴な決定を発表してしまったのです。昔はよくお役所に見られた、杓子定規で横暴な処分です。このために、哲学館は、大学へのスムーズな歩みを一旦中断されることになります。

その授業を受けていない生徒まで、そういう不利益を受けることに対して、円了は、最後まで抵抗しましたが、このとき、つくづく日本の狭さ、世界観のなさを痛感したようです。著者ミアヘッドの住むイギリスに滞在していただけに、日本の小ささが身にしみました。そしていよいよ、自分は政府のお世話になどならず、純然たる独立精神でゆこうと決心します。この事件は、『西航日録』の終わりに書かれている厳しい日本批判を書かせた動機の一つにもなっていると考えられます(と)。

そんなことはありましたが、この欧米旅行は続けられ、通過したすべての国の、あらゆる大学、小・中学校、幼稚園、救貧院、病院、工場、図書館、孤児院、託児所、宿泊施設を見学し、「貧民に飲食を施す組織」(うんと安く食べさせる所)では、実際に入って食べてみたりしています。一シリングで十分満腹した、などという所が貴重な証言になっています。また大西洋を渡って十六年ぶりに見たアメリカのニューヨークが、大量の海外移民を受け入れて、目を見張る変貌ぶりだったという証言があり、二十世紀初頭のアメリカ発展を実際に見た人が語っているという点で重要です。今われわれが知っているニューヨークの原型は、ほぼこの頃すでに出来あがっていたはずなのです。

この世界旅行で、円了は、日本の将来に大きな危うさを感じました。民間教育、社会教育によって、日本人に欠けている所、すなわち、ねばり強く、大きくものを見、進んで実行する精神を養うため、「修身教会」という

ユニークな運動を始めたのは、帰国直後のことでした。だが、間もなく日露戦争が始まり、日本は、精神を深めていく方向とは違う進路をとって歩むことになりました。「修身教会」運動がそのために、十分に効果をあげられなかったのは、残念なことと云わねばなりません。

日露戦争は幸い日本の勝利に終わりましたが、この勝利の結果、とうとう日本が世界の一等国になったのだと思いいこんで、のぼせあがった面が明治四十年代の世相には生まれて、それ以後のわが国の進路にも少なからぬ影響を与えることになります。そのことを敏感に感じて、明治四十四年に文豪、夏目漱石が、有名な講演「現代日本の開化」でそれを警告したことは、ご存知の方も多いと思います。漱石は、日本がもつぱら外国の刺激によって、借り物の発展をしてきて、幸運にも今までは成功してきたが、ずいぶん無理をしている現実を忘れていゝぞ、こんな調子では、「日本の将来といふものに就てどうしても悲観したくなる」と、言っております。この言葉は、日露戦争前に円了が書いている、「日本の強さは本物でない、みせかけの強さだ」「精神を入れ替えないと日本は駄目になりますぞ」といった、あの警鐘と見事に一致しているといえないでしょうか。

円了最後の世界旅行の目標は、旅行記のタイトルからも分かりますように、南半球の探索にあったことは明らかです。きっかけは、先ほども言いましたように、国内の巡回講演なのですが、そのような折には、市民たちの質疑応答が必ずあります。そんな時、移民の希望者から、移住したい土地オーストラリアや南米の情報がほしいという、かなり切実な要望が出て、それに答えられないことが残念でした。これは円了の経験したことのない未知の領域でした。しかし、これからの発展の可能性は南半球にあると、見とおしをつけて円了は、次の目標を、南半球と決めました。そしてその皮切りとしてオーストラリアに先ず向かうことになります。

ところで、例の哲学館事件以降、学校の運営のうえでは、円了は周囲と意見の合わないことも多く、かなり永く健康も害していました。そこで思い切って明治三十九年に、哲学館大学長、附属の京北中学校校長を辞職し、名誉学長、名誉校長となりました。そして翌年には、学校は東洋大学と名前も変わり、一切の公けの責任から解放されていました。そのせいでしょうか、旅行記『南半球五万哩』の筆はのびのびとして、旅そのものを楽しむ気持ちがあふれています。旅行記としては、一番面白いといっていいでしょう。

と同時に気がつくことは、この度の旅行では、各国で、今日のわれわれが「近代化」という言葉で表現している様々な現象に出会っていることです。もちろん当時「近代」などという概念はまだ今のようには使われていなかったのですけれども、円了が、これに率直に目を見張っていることです。そのなかでも、女性の社会進出という現象に対しては、一番心を動かされました。日本では、女子の高等教育がまだそれ程考えられなかった時代でしたが、オーストラリアの各大学では、全学生の中、女子学生が何割も占めているし、又南米アルゼンチンの師範学校などは、生徒全員が女性であったり、チリの或る大学でも全学生の三分の二が女子であったりする事実には、圧倒されたに違いありません。殊にチリ社会では、電車の車掌や駅の売り子が全部女性でしたから、女性の進出が必然の、そういう「近代」の形というものを見た思いがしたに違いありません。この経験が、東洋大学が他大学に先駆けて、大正五年、女子学生を受け入れるきっかけになったことは確かです。

さて南半球を目指したこの旅行も、結局は北半球にまで、足を伸ばしてしまうのですが、その北欧やドイツでは、八年前にはなかった自動販売器が出現しており、驚きました。われわれの社会ではこれに取り巻かれているともいえる、近代の発明の象徴です。ロンドンの変貌ぶりにも驚きの目を見張りました。いい意味で保守的だったこの西洋の大都市も、馬車が自動車に、地下鉄が電車に変わったとかの変化以上に、イギリス人が大切にして

いたホーム・ライフの崩れや、キリスト教の勢いの衰え、女性の喫煙、飲酒など、人々の精神環境そのものの大変化が目につきました。近代のデカダンスの現れともいえる現象です。

オーストラリアの最南端都市ホバートでは、初めて、観衆二万人を集めた大衆スポーツのフットボールを見物して、大衆化という現実を体験しました。またこれは全く別の政治的事件ですが、中国の辛亥革命が起こったのが、この年、一九一一年でありまして、太平洋を帰路にしていた円了は、ハワイ寄港中に、孫文が中華民国の臨時大統領に選ばれたというニュースに接しました。ホノルル市の中華街に、新しい晴天白日満地紅の国旗が掲げられ、共和国の誕生が祝われているのが目撃されました。「眠れる獅子」といわれてきた大きな隣国がとうとう目を覚ました、これも近代誕生の瞬間だったわけです。このように、行く先々で、二十世紀の幕開けを告げる様々な現象と出会うこの旅行の不思議なタイミングは、あとの時代からこの旅行記を読む者をわくわくさせるものがあります。

考えてみますと、円了の講演の聴衆に、日本の外に住む場所を変えて、別の国で生きていく道を見つけたという、移民の希望者があり、その人たちの真剣な質問に答えたいという動機から、円了はこの世界旅行を企てたのでした。「移民」というグローバルな民族移動現象自体が、はつきりと近代の特徴をなしているのですから、その旅で出会う事柄が、事毎に「近代」の特徴を備えていても不思議ではありません。円了自身ははつきりそれを自覚していたかどうかはともかく、彼の筆が、そういう近代の特徴を見逃していないのが注目されます。

それからもう一つ、この三度目の世界旅行は、これまでの旅行では得られなかった、地球感覚とでもいう新しい意識の点でも目立つのです。南半球という未知の領域に足を伸ばしたことが、いやおうなく地球全体への視野の拡大につながっているのです。北半球に住む者がもう一つの半球に足を踏み入れることは、地球を実感するこ

とも通ずるようです。円了は、カメラを持たず、絵も描かないからというので、旅の途中の出来事を、たくさん漢詩や短歌に詠んでおります。オーストラリアで歌った短歌に、

故郷（ふるさと）はいづくなるかと人問はば、大地の下と今ぞ答へん、とか  
南極のま近くなりしるしにや、彼方よりくる風の涼しき

とかいひのがあります。特にうまい歌というではありませんが、初夏に日本を旅だった船が秋の気配濃厚な土地に到着したことの、不思議な感慨が現れています。頭では地球儀が分かかっていても、自分の足でそこを踏むことの違和感は、やはり来て見なければわからなかったもので、それは、感動というよりも、一種の快感だったに違いないありません。

このオーストラリア、シドニー寄港中、不思議な出会いがありました。乗ってきた日光丸が主催して、シドニー市に滞在中の日本人三十人余りを、船の日本食に招待したことがあったのです。円了も一つ講演をさせられましたが、その席にたまたま、先ほど一寸触れた南極探検隊長の白瀬中尉が、南極探検船「開南丸」船長と一緒に連なっており、円了は感激して、長い漢詩を作って励ましました。すでに南氷洋に氷が張っていて船が進むことが出来ず、目標を目の前にしながら春を待っているとのことでした。二百余トンの開南丸は、今の「しらせ」のような強力な砕氷船ではなかったのです。

しかしもしこの偶然の出会いがなかったら、次のようなことは起こらなかったかも知れません。それというのも、円了は、本来は、オーストラリアの次には南アフリカ、次いで南アメリカという風に、南半球だけで移民の



可能性を探るつもりでした。所が、オーストラリアの次の南アフリカでは、日本人排斥が強く視察するのもむづかしいとわかって、すぐ南アメリカに直行しようとした所、今度は直行の船便がない。一旦ロンドンを経由しなければならぬことになって、やむなく大西洋を北上して、また北半球に戻りました。いろいろ偶然が重なったのですが、時間的にゆとりが出来て、円了は、お参りしそなっていた『失樂園』のミルトン、『ベニスの商人』のシェークスピア、『万有引力』のニュートン、『種の起源』のダーウイン、『衣装哲学』のカーライル、凧の実験や『自叙伝』で有名なフランクリンといった、日本では誰一人知らないものもない、西洋文明のそうそうたる偉人たちがゆかりの場所を訪ねていたのです。その円了の目に、或る日「北極海観光ツアー」の広告が飛び込んできました。チームズ川から出発するというのです。

そこで思い切って計画変更、エボン号という豪華観光船に乗って、二百八十二人の観光客とともにノルウェー海をさらに北上し、ノルウェーのノールカップという北極海ぎりぎりの断崖に立ち、その海の上に浮かんで沈まない太陽に向かってシャンパンをささげるといふ、当時の日本人には望むべくもない北極圏体験をしたのでした。その部分の素晴らしい記事は、曲りなりにも南北両極地をさわめた思いと、地球に生きている自分を実感できた者の感激がほとばしっている感じが伝わります<sup>③</sup>。或る意味で、一九六一年、宇宙飛行士として初めて大気圏外から地球の姿を見て、「地球は青かった」と叫んだガガーリン中佐の感激に近い感動だということが出来ます。ずいぶん目的とは離れた行動のようにも思われますが、あの南極探検隊にささげた激励の漢詩と響きあう、まことに地球人的な快挙ではなかったでしょうか。まだ明治が終わっていない時代の出来事とは思えません。

一方、移民のための実地見学は、南米の主要な国にわたりましたが、ブラジル、ペルーを日本人に向けた国と

して、推薦していません。が一般的には、受け入れがどこでもすでにかなり困難になりつつあった事情が、全体としてうかがわれます。しかしいずれにしても、円了がしているような、地道なコーヒー園見学こそ、情報収集では、最小限必要な手続きであったことは明らかです。自分たちの運命を賭けて出かけた多くの日本人移民が、情報不足のために、その後くり返し陥った悲劇は、ご存知のとおりです。円了は、農園見学と同時に、その国の教会を訪れて宗教の水準を推しはかってみたり、美術館の収集品を見て、文化の程度を測ってみたりしております。限られた時間にしては、きめ細かな観察が、一つ一つの国に対して下されているのです。

この明治最後の大旅行を追っていきますと、最近新聞紙上をにぎわせている「南北問題」という言葉を思い出します。それはイデオロギーの違いからの様々の対立が象徴する「東西」という軸が、貧困や民族や、地球上のあらゆる問題を、全人類のグローバルな視野で解決しようとするときに要請される、もう一つ大きな軸の立て方であります。その非常に早い先取りが、この旅行記に見て取れるような気がいたします。北半球は年をとった人間のようなだ、と言い、「之に反して南半球は血気熾んなる青年時代の如くなれば、今より後、吾人の活動すべき舞台は、北半球にあらずして南半球にありとは、余が断言するを憚らざる所なり」と円了は書いておりますが、これらの言葉には、移民の可能性のことを指していると同時に、これを超えたそれ以後へ向けられた大きな視野を感じます。

またそのグローバリゼーションの特徴の一つに、人と、モノ（経済）と、情報の自由な往復ということがありますが、円了の書き残したものからは、それらの事柄が観察されたままに、実に豊かに発信されていることが感じ取れます。たとえば『南半球五万哩』のなかには、「人」の移動が見事に描写されている部分があります。オ

ーストラリアから南アフリカへ向かうペルシック号という一万一千トン級の大衆向けの客船で、二十七日間の長い船旅を、数百人の下層・中流階級の家族連れとともにした時の記録です。波の荒いインド洋上を、船酔いに苦しみながらも、彼らがどんなに日常の明るさと社会秩序を大切にしながら、自分たちの目的地に向かって行ったかが、淡々と書かれているのですが、おかげでたった独りの東洋人の円了が少しも孤独を感じることはありませんでした。また世界各国の活発な産業の実態については、生産物の具体的なデータが挙げられておりますし、風俗や習慣については、その土地ごとの絵葉書がふんだんに挿入されており、これによっても、生き生きと伝わってまいります。情報が詰まっている感のある場面場面の連続ですが、記録し、保存し、報告しようとする強い意志がそこに感じられます。その目の高さが今日のわれわれと同じであることが見逃されてはなりません。

さらにもう一つ、最近わが国で叫ばれるようになったこととの大きな関連を指摘するならば、これらの観察に行き渡っている、国民一人一人の主体的な発想と行動への、親愛に満ちたまなざしです。「官から民へ」或いは「民営化」といった、日本現代社会が求めている方向性の原動力となっている、生き生きとした自発的個性への待望は、井上円了が、こんなにも早く力説していたことと見事に一致します。円了が、世界を旅して先ず感じたことの第一が、各地の民衆ののびのびした積極的な個性でした。福祉の精神もまた、このことを抜きにしてはありえないものであります。

それを育む根本には、宗教と並んで、しかしそれ以上に「教育」があるのだという事、それも、学校のなかだけのものではない、世界のあらゆる現象を教材とする「大教育」の精神こそ必要だという、円了の主張をもう一度思い起こしていただければ、まことに嬉しく思います。

ご静聴ありがとうございました。

【注】

(1) 井上田了博士の「大教育」の主張

国ノ本ハ人ニアリ人ノ本ハ精神ニアリ精神一タヒ定マリテ初メテ国家ノ富強ヲ講スル事ヲ得ルナリ……而シテ其精神ヲ一定スルノ法ハ教育ニヨラサルヘカラス其所謂教育ハ独リ学校ノ教育ヲ云フニアラス独リ智力ノ教育ヲ指スニアラス社会百般ノ事々物々政治宗教人情風俗ヨリ天文地理氣候地味ニ至ルマテ苟モ我カ体外ニ圍繞セル万象化皆尽ク我ヲ教育シテ一時モ休マサルモノナリ故二人若シ此種ノ教育法ヲ講セント欲セハ事々物ニツイテ其我精神上ニ及ホス所ノ影響結果ヲ考ヘサルヘカラス此ノ如キ教育ハ若シ之ヲ学校ノ小教育ニ比スレハ実ニ大教育ト云ハサルヘカラス余ハ此大教育ヲ以テ自ラ任セント欲スルモノナリ(『欧米各国 政教日記』明治二十二年より)

(2) 日露戦争まえの日本を見ての感想

日本は東洋の一強国として世界に知られたるも、其強たるや虚強にして実強にあらず、之を印度支那に比するに、斬然頭角をあらはす所あるも、之を欧米に較するに、猶ほはるかに其後に瞠若せざるを得ず、且つ夫れ日本人の氣質たるや、小国的にして大国的にあらず、一時に急激なるも永く堅忍する能はず、小事に拘泥して全局を観るの識見に乏し、人を品評し褒貶するに巧みなるも、自ら進取し実行するの勇を欠く、幸に戦に臨みて死を顧みざるの士氣あるも、奮然として起ち、此欠点を補ひて大に為す所なかるべからず、……(『西航日録』明治三十七年より)

(3) 北極近いノルスケーブから沈まぬ太陽を望む

……風光雄大、眺望絶佳、之に加ふるに満目凄凉肅颯の趣ありて、太古の海山に接するの思あり、其壮快実に極りなし、時に夕日高く北天に懸り、多少の雲烟を帯ぶ、同行と共にシャランパンを傾け、万歳を呼んで帰る、……(『南半球五万哩』明治四十五年より)